物部（松江市）

◆1◆

「起業家精神」

明治11年の創業で、来年140年の節目を迎えるのが老舗米穀店の㈱物部（松江市南田町、物部伸吾社長）だ。コメ販売を中心に据えながら、灯油やガスなどの燃料事業で躍進し、さらには山陰地域での酒のディスカウント販売の先駆けである「酒ゴリラ」も展開、多角経営で成長してきた。常に時代の動きを読み取り、時には先取りしながらのかじ取りで、海外産米の流入や米自由化という業界を揺るがす大きな荒波も乗り越えてきた。その根底に流れるのは「台所」。時代とともに生活スタイルは変わろうとも、人々が集い、生活基盤にもなっている不可欠な場所をコンセプトに、社業を進展させている。

本社前に立つ物部伸吾・現社長（左）と会長の宏太郎氏＝松江市南田町

先駆けて石炭販売

日本人とコメとの関わりには長い歴史がある。日本におけるコメ作り・稲作の始まりは、近年の調査・研究では、約3千年前の縄文時代後期に大陸から稲作が伝わり、行われていたとされる。

物部の低温貯蔵庫（左）とその隣の精米工場の外観に描かれる「ヤマモ」印＝松江市南田町

農林水産省の資料によると、昭和42年には国内の年間生産量は1400万トンの水準になる一方、国内消費量は38年の1341万トンをピークに下降線をたどり、コメ余りの時代に突入することになる。

物部家は、島根県鹿島町（現松江市鹿島町）が発祥の地で、代々農家だったと伝わる。江戸時代後期の寛政年代（1790年代）の頃には、現在の松江市内に出て、薪や炭を販売する

50代頃の4代目・物部太郎社長

正月の親族の集まりでの物部太郎社長（右）と長男の宏太郎さん、長女の竹内弘子さん（昭和60年代前半）

薪炭業、道路の補修を請け負う仕事をしていたという。

創業者の物部平三郎は、誕生年は不明だが江戸時代後期の生まれで、人柄は自由闊達だったと伝わっている。

平三郎は明治11年、現在の本社位置から北西に約200メートルの米子川東岸にあった武家屋敷跡の家と土地を購入し、先代からやっていた薪炭業の「物部商店」を創業した。

道路補修をしていたことから船や大八車などの輸送設備があり、水運に向いた場所を商いの地として選んだ。

平三郎は練炭や炭団を製造販売する傍ら、当時としては新しい燃料の石炭の販売を松江市内で先駆けて手掛けており、現会長の宏太郎（81）は「平三郎は先を見据えた起業家精神を持っていた」と話す。

明治期、水運に着目コメ販売 地の利が生き売り上げ伸ばす

「ヤマモ印はいい商品」

その精神が米穀事業の源にもなった。松江市内で薪炭などを販売する中で水運に着目。これを活用してコメを買い付け、販売することを思いつくのだ。急速に世の中が開け、近代化していく明治期にあって、コメの消費量も全国的に増えていたという点も下地にあったと推察される。

平成14年、本社内での物部伸吾社長、宏太郎会長、物部太郎前社長＝松江市南田町

コメは現松江市の川津地域や宍道地域、現出雲市の斐川地域、平田地域などから買い付け、精米して現松江市内を中心に販売。平三郎がにらんだ通り、物流に適した川沿いという地の利が生き、急速に売り上げを伸ばしていった。

平三郎には4人の娘がおり、番頭をしていた林太郎が長女タルと結婚し婿入りして、2代目を継いだ。

林太郎の長男、3代目の定重が店を仕切っていた明治後期から昭和前期の頃には、同市母衣町に支店を出し、大阪にコメを卸すなど事業を拡大した。

この頃、同社の商品包装や道具には、物部家の屋号からきているという「山」という字の下に片仮名の「モ」を入れた「ヤマモ」印をロゴとして入れていた。

物部家に伝わる話では、3代目の時代に大阪のコメ業者から「ヤマモ印はいい商品という印象があるから使わせてほしい」と言われたという逸話があり、同社の卸すコメが当時、大阪で高く評価されていた証しといえる。

同社では、現在も建物や社用車などに「ヤマモ」印を使用している。

「三方よし」の精神

4代目の太郎は、定重の長男として明治42年に誕生。やんちゃで頑固な性格だったという。13歳から2年間、大阪の米問屋で丁稚修行を積んだ後、3年間の兵役を経て、22歳になった昭和6年から家業に加わった。

11年、太郎は日中戦争の召集を受けて中国の戦地に送られ、13年に足を負傷して帰国した。回復後、家業に戻ったが16年に知人を頼って中国に渡り、天津市を中心にブローカーの仕事していた。18年には現地召集を受け、再び中国の戦地に赴いた。

同社を取り巻く環境も、16年12月に太平洋戦争が勃発すると暗雲が垂れ込める。国内の食糧事情が深刻化し、政府は17年、食糧管理法を施行し、政府がコメなどを統制する食糧管理制度になり、米穀配給通帳による配給制に移行した。

この時に作られた食糧管理法は平成7年まで法律として存続し、同社を含め、コメに関わる業界に影響を与え続けることになる。

戦時中は米屋の整理統合も行われ、同社も昭和16年に廃業を余儀なくされた。

当時、小学生だった現会長の宏太郎は、戦中や終戦直後は配給の食糧が不足すると母と共に、金や衣類を食糧と交換するため、松江市近郊の農家を歩いたという。

21年に太郎が中国・山西省から復員。26年にようやく創業地で「物部米穀店」として本業を再開する。

21歳の頃の物部宏太郎・現会長（左）

太郎は、商売をする中で「三方よし」という考え方を掲げる。これは売り手、買い手の双方が喜び、世間も幸せになる商売を目指すことを指し、今日も続く同社の経営理念になっている。

5代目の宏太郎は11年、太郎と妻勝代の長男として誕生。本人いわく「おとなしい子どもだった」という。

中学時代、家業の手伝いと両立しながら野球部に打ち込んでいたが、父から薦められた松江商高に進むには、今の成績では難しいと担任に告げられる。宏太郎は考えた末、3年の1学期半ばに退部して勉強に集中。当時競争率が高かった松江商高に合格した。

30年、同高を卒業した18歳の宏太郎は社業に参加する。

（文中敬称略）

―次号に続く―

（堀江純一郎）

㈱物部 / 松江市

DATA

創業	1878(明治11)年
設立	1952(昭和27)年
営業種目	米穀、雑穀、燃料及び住宅機器の販売、設置工事、住宅リフォーム
資本金	800万円
代表者	物部伸吾
役員	物部宏太郎、物部和子
従業員数	10人
売上高	約2億3千万円
所在地	松江市南田町52
電話番号	0852(21)4733
関連会社	㈲グローバルシステムズ